
来訪者

唐務新斗

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

来訪者

【Nコード】

N5577P

【作者名】

唐務新斗

【あらすじ】

どれだけすげなくされても、彼女は彼のもとを訪れずにはいられなかった。そして、今日も足を運んでしまう。

なんでだろう、と彼女は自問する。

なぜ、こんなに何度も彼の家を訪れてしまうのか。玄関先ですげなく追い返されてしまうことは分かっているのに。

これまで何度、彼のアパートを訪れ、この古ぼけたドアの前に立ち、年季の入ったチャイムを押したことが。チャイムを押して、待つこととおおよそ三十秒。

がちやりとドアノブを回す音が聞こえた。

開いたドアから現れた彼のうんざり顔も、もはや彼女にとってお馴染みのものだ。

だけれども、本当にうんざりしているのなら、ドアの向こうでレズ越しに確認した後、息を潜めて居留守を使えばいいのに、とも思う。

「また、お前か」

ああ、いつものぶっきらぼうな口調だ、と彼女は不思議な安堵を覚えた。

こんな風にすげなくされても必ず出てきてくれるから、どうしても彼に対して期待してしまう。しなければ良い期待をということは承知している。切ない思いを押し殺し、彼女もまた、いつもの言葉を口にする。

「新聞をとってくださいよ」

「……お断りだ」

「洗剤をサービスしますよ」

「……必要ない」

いつもならそこで会話は終わり、彼はドアを閉ざすはずだった。そして固く閉ざされたドアを前に、彼女は胸の痛みを堪えるというのがいつものパターンなのだ。

しかし、今日の彼は違った。

「映画のチケットをつけてくれるなら、とってもいい。二枚、な」
「えっ」

彼女は驚いた。彼が新聞を取ると言い出すなど、思いもよらぬことだった。彼女は勧誘し、彼は断り、それでも彼女は勧誘する。その短い逢瀬が、彼女にとってこの上ない喜びだったから。断られればまた、彼の元に訪れることが出来る。では、彼が新聞を購読すれば？ 答えは一つ。

もう、彼に会うことは無い……。

切ない胸の痛みに耐えながら、彼女は新聞の契約書と共に映画のチケットを差し出した。

彼は無表情でそれを受け取ると、乱暴な手つきでチケットを一枚、彼女へとつき返した。

「今日の日曜日、空いているかな？」

その言葉の意味するところを悟り、彼女は大輪の笑顔で彼に答える。

「空いています！」

（後書き）

最近は勧誘の人をあまり見かけなくなった気がする。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5577p/>

来訪者

2010年12月18日15時33分発行